

郷土史教育で小中高が交流

多くの史跡が点在する姫路市網干区で、地元の小、中、高の四校が四月から、それぞれ連携して地域史を学ぶ。テキストには郷土史家が学習レベルに応じて書き分けた三冊の学習資料書を採用。中学生が小学生を史跡に案内したり、高校生が中学生に講義することなども検討する。郷土史教育で小中高が手を結ぶのは、全国的にもほとんど例がなく、県内では初の試み。地元の住民が教壇に立つことも計画され、各校は「郷土愛が芽生えるきっかけにつながれば」と期待を寄せる。

(霍見真一郎)

住民も教壇に

「年代を問わずに学べる郷土史は、小中高の垣根を越えた交流を生む機会となり、教材だ」と、網干区立網干高校の谷中吉典校長が旗振り役となり、網干中、網干小、網干西小の校長四人が、地元の歴史家をつくる網干史談会(増田喜義会長)を訪ねたのは昨春。指南役を依頼された増田会長は「子どもにもっと地元を知ってほしい」と、全面支援を約束した。

問もなく、史談会を核に自治会やPTAも入れた「郷土網干の歴史教育を進める会」が発足。祭りで培われた地域の結束力は強く、協力者の組織化はスムーズに進んだ。

姫路・網干区の4校



3冊の学習資料を書いた網干史談会の増田喜義会長(姫路市網干区)

地元史家らレベル別学習書

「年代を超えた交流の息吹はすでにある。『網干中の生徒が、わが校の歴史を近々調べに来る』と喜ぶのは網干西小の八木愛子校長。網干中の森谷弘明校長も「いつかウチの生徒の手で小学生に史跡案内ができれば」と夢を語る。

網干高校では昨年十二月、史談会のメンバーが教師に代わって講義に立ち、「歴史散歩ラリー」と名付けて生徒が地域に飛び出した。

「連携がうまくいけば、小中での体験学習を高校での研究につなげることもできる」。教育分野での異世代交流の手法として県教委も注目しており、「授業などソフト面でのつながりをさらにこれから考えたい」と平野成介・網干小校長は話す。



地域に散らばる史跡をめぐる網干高校の「歴史散歩ラリー」——姫路市網干区興浜、大覚寺

《川西組》

馬場村 浦部村 市場村 金剛山村
 袋尻村 山津屋村 黍田村 野瀬村
 伊津村 片村 加家村 稲富村
 山田村 釜屋村 黒崎村 中島村
 下村 碓岩村

《網干組》

興浜村 浜田村 菟屋村

以上であるが寛文12年(1672年)余子浜村と大江島村が幕府領(天領)になった。幕府大阪城代では、近在の幕領を「余子浜組」とし次の村々であった。

余子浜村 大江島村 西土井村の全域と新在家、熊見、山戸、勘兵衛の各村の一部を代官が治めた。代官の更迭は頻を極めた。(西讃府志、網干町史)



丸亀藩網干陣屋図 (渡辺家文書) *印は武家屋敷

(2) 網干三ヶ村の分割
 網干は元々一ヶ村で正保郷帳(1644~1647年村高帳)では網干村高千四百六十石と記録され、寛文4年(1664年)の京極家文書に横浜興浜村として七百四十九石余とし、貼紙に興浜村四百九十石余とする。これによって新在家、興浜、余子浜の各村高は計算できるが、寛



網干陣屋門 (新作)

文12年(1672年)余子浜村が幕領となって村高帳が分離したことになる。

特に室町時代に「あぼし村」とされる垣内村を余子浜村に包含した。これより以来、網干は三ヶ村として農作、水利、祭事等の年中行事を一緒に行ってきた。近年、垣内村の人口が増大し、旧三ヶ村を平成元年(1989年)より四ヶ村として諸般の行事を協同分担している。

(西讃府志、揖保郡地誌、姫路市史、網干町史)

(3) 江戸時代初期の網干経済の興隆

往古、重量物の運搬は、道路事情や運搬具の関係から舟運が最も多く利用された。舟には、河川水路と、海上航路があるが先ず揖保川の舟運について述べよう。

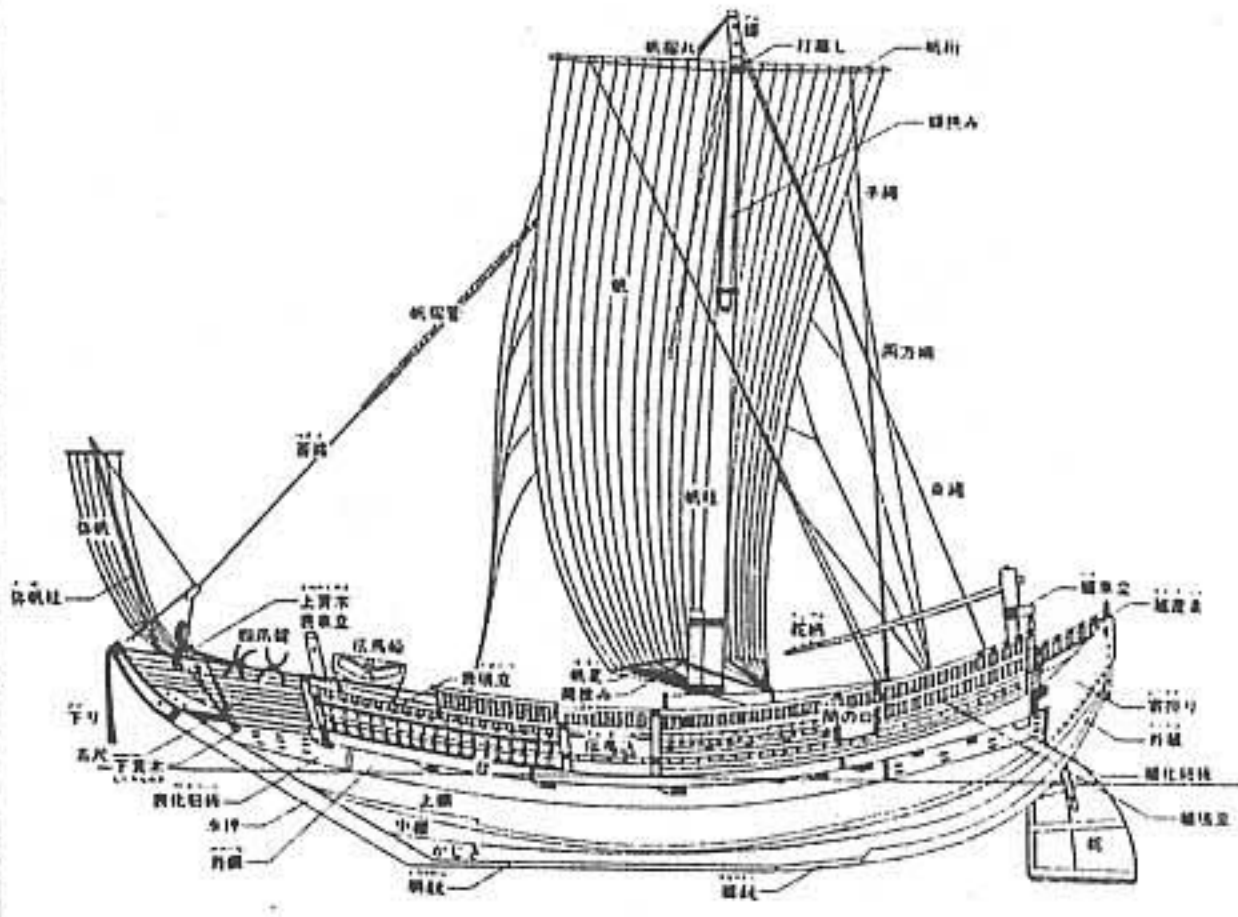
河川の舟運については高瀬舟を用いるが、揖保川は兵庫郡山崎町と対岸の出石から網干港まで江戸時代初期に開通した。危険な岩場を自費で浚ちようとした篤志家に依るので幕府も恩賞を与えたという。揖保川の流域産米石数は、約十萬石に達し、この半数が上方や江戸へ送られるので高瀬舟に積み込み網干港まで下るのだが、1艘に二十石(50俵)として2500艘となり、素麵、醤油、雑穀、薪炭、木材、砂鉄等の産物を加えると年間約4000艘が下り、また筏が連ねて流すので揖保川の河口は閉ざされるばかりであった。龍野藩では新在家に蔵屋

敷を設け藩主の休憩する御茶屋を置いた。(現網干小学校)幕府は余子浜に蔵元(加藤家)を置き揖保川流域物産を管理させた。その他は庄屋(安田家)が管理した。

(宍粟郡志 揖保川流通史、網干町史)

次いで海上輸送であるが、網干の船舶は中世から盛んであった。室町時代中期の文安2年(1445年)兵庫北関入船納帳には、当年中の百石以上の入船は室津船籍82、網干62、明石51、飾磨三港29、赤穂20艘となっており播磨国の中でも第2位を占めている。江戸期に入ると回船業を始めた佐々木綱次(灘屋)の北前船が就航すると益々実績を上げて巨万の富を築いたのであった。しかし、京極家が丸亀に転封後、万治年中より正徳年中(1711~1715年)にかけて二百石以上の回船は興浜村に皆無となって衰微していった。

(兵庫北関入船納帳、網干町史)



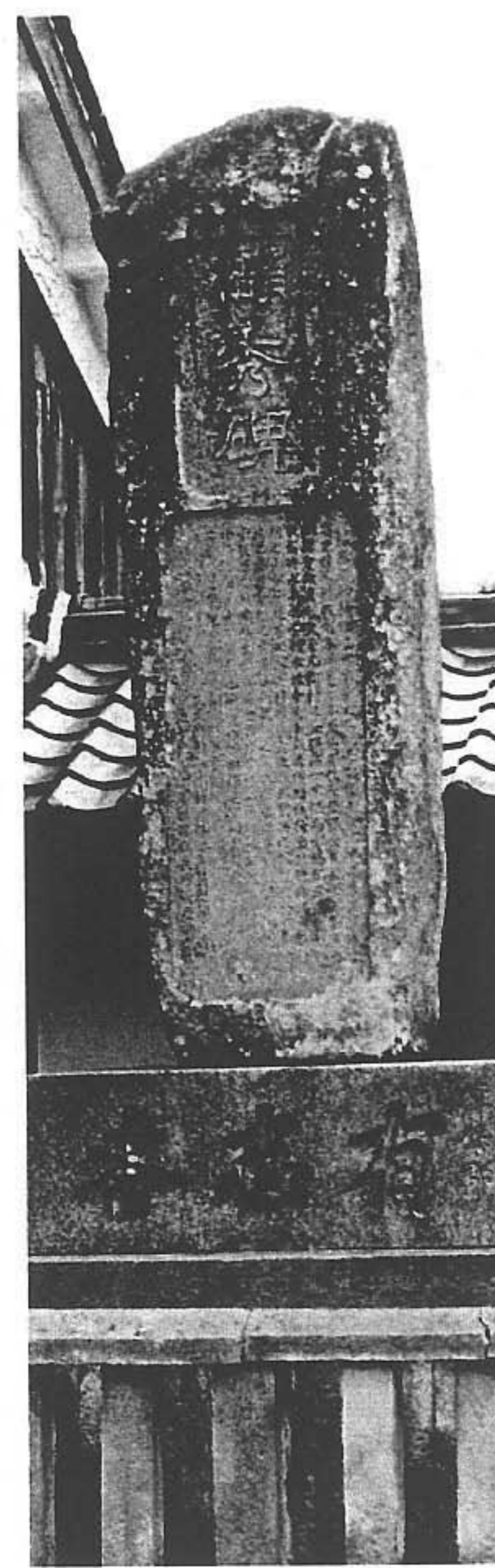
北前船 (福井県三国町郷土資料館図版)

十一、神楽岡と揖保川堤

余子浜の揖保川堤を南へ歩くと船渡八幡神社（通称若宮さん）に至る。ここを神楽岡という。その名の由縁は、昔神功皇后が三韓征伐還幸の砌、船をこのあたりに着けられ、神楽を奏された由緒による。

この伝説に対し第二次大戦中から朝日山南麓に「神功皇后船着岩」があるとする伝説があり、前者の二論が対立していたが、和久や坂出地区より後期縄文式土器や堅穴住居跡が発掘され、当時既に陸地化していたことが立証されたため、後者論は解消されるべきものとなってしまった。

若宮様の北に道を隔て網干町初代町長及び県会議員を歴任した加藤邦太郎氏の碑がある。彰功碑の題字は勝海舟の筆である。あの有名な江戸城開城のとき、西郷隆盛と劇的な会見をした海舟と、網干との関係に誰もが疑問



勝海舟の筆、加藤氏櫛秀碑

を持つだろう。

それは万延元年（一八六〇）徳川幕府が、日米修好の使節を米国に送るため、軍艦成臨丸の艦長、勝海舟に命じて我が国では初めて太平洋横断の壮挙を成し遂げたのであるが、この成臨丸に赤松則良という網干町ゆかりの人物が副官として乗組員となっていたのである。

則良の父の政範は幼いとき、母が志方村へ再婚したので網干を去り、江戸に下り奉行所目安方であった吉澤家に貰われた。政範は勤勉で与力に進んだ。子の則良は祖父の赤松氏を名乗り、十五才のとき蘭学を学んで幕府海軍に入り、勝海舟の部下となった。後に明治新政府に出仕し、海軍中将従二位男爵を授けられた。題字は河野東馬先生の所望により十日たらずで網干に届けられたというが、これは赤松氏が労をとったからにはかならない。

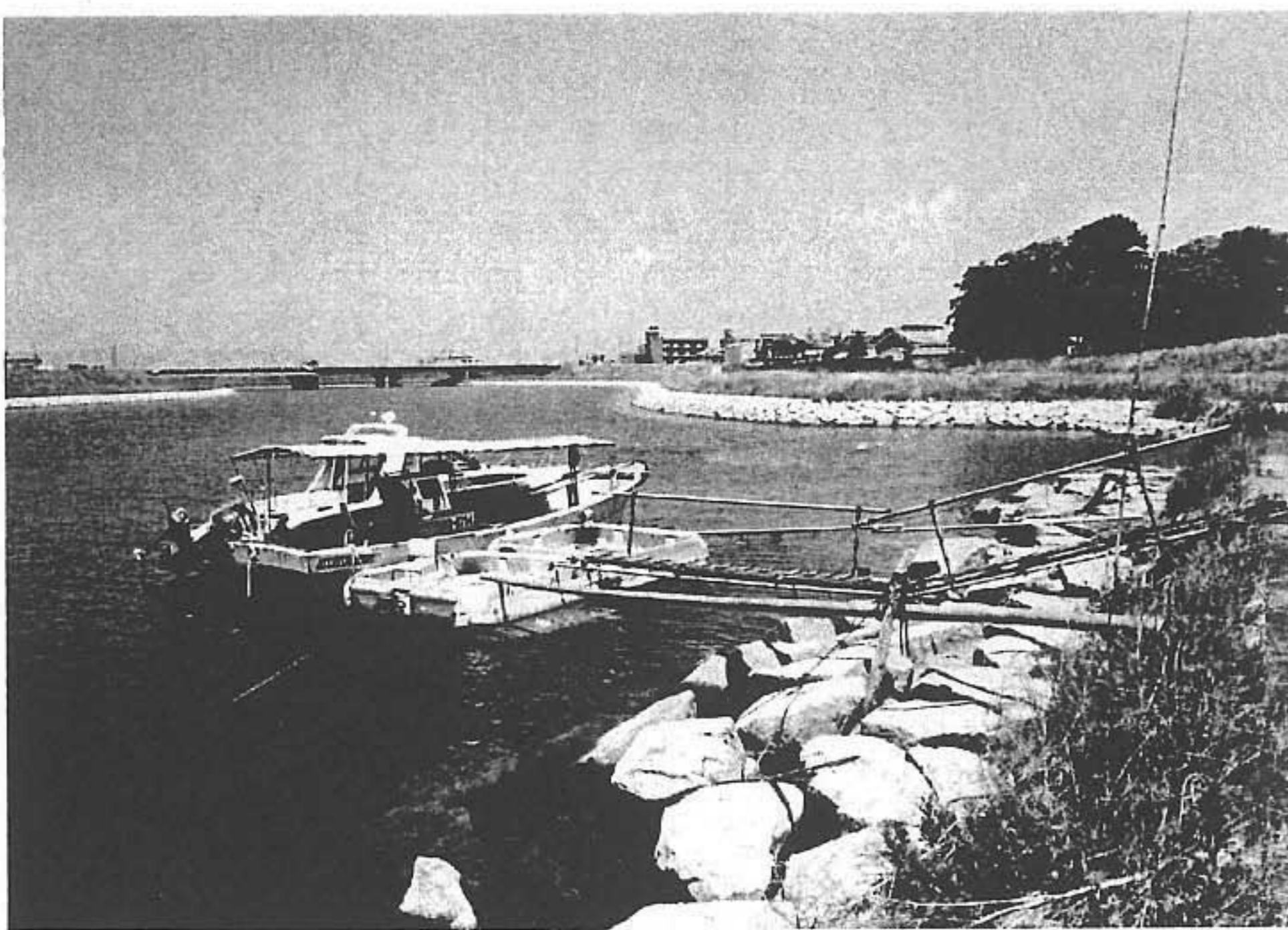
船渡八幡神社を西に出れば、眺望は西に開けて素晴らしい。正に山紫水明で特に夕景が美しく河野鉄兜先生の詩文「題網干」を思い出す。

往昔、若宮裏の深淵は、船渡八幡の御手洗場として殺生を禁じ、鯉や鱸が澄んだ水に群泳していた。加藤高文（邦太郎氏の父）の書斎を観魚楼と名付けた鉄兜の詩友、柴秋村（阿波の人）が詩を賦している。

観魚楼詩

- 溶々楼前水（ようようたり楼前の水）
- 復々見遊鯉（せきせきとして遊鯉を見る）
- 倚欄凝静観（欄によりて静観をこらす）
- 此梁岡莊子（此のたのしみ莊子にきく）
- 三十六鱗全（三十六鱗は全し）
- 龍門咫尺裡（龍門は咫尺のうち）
- 一夜風雨黒（一夜の風雨黒くして）
- 神光藻間光（神光は藻間に光る）

姫路市町名考（橋本政治著）によれば「余子浜村は、余部村の人の移り住むによる。」としているが、室町時代の吉川文書には横浜村と書いており地形や実際の生活から自然にできた地名ではないかと考えられ古名は「船渡」で現在でも字地名で残る。船渡りは揖保川を下る船だ



神楽江（右手に若宮、遠方には網干大橋）

けでなく、瀬戸内海を行く船も伊刀島や生島に囲まれた
播磨湯の湊に入港した。(網干町史。二十七ページ)

明け方は汐子も淋し海人の位む

揖保のみなどの秋の夜の月(後鳥羽院)

誰もさぞものは悲しき友千鳥

揖保の湊に鳴きて過ぐなり(詠み人知らず)

飾磨津に鴨の声こそ聞こゆなれ

伊保の湊に鶴や鳴くらん(読み人知らず)

湯とは海の干潟となる所で、海の旅路は、汐待ち、風
待ちの淋しさを歌人達は和歌に詠んでいる。宝暦十二年
刊行の「播磨鑑」には「いほの湊」は印南郡の伊保とし
ている。飾磨からは八家山が突出し開場四里あり、鴨が
鳴くは聞こえず揖保の湊に鶴が飛来するは天正の頃まで
との伝承がある(網干町史)

播磨国風土記の「伊刀島」は品太天皇(応神天皇)の
狩の折り、射目人が逃げた鹿が泳ぎ渡ったのを見たこと
からできた地の名称で、島の松影に水鳥と雁や鴨の群れ
飛ぶようすも偲ばれて詩文の「題網干」も及ばない美観
であったと推測される。

中世には、新宮、龍野より、また、江戸時代初期、宍
粟郡山崎町出石より高瀬舟の運行が開始、網干川の運河
が神楽岡南から東に大津茂川まで漕えて築港し、揖保の
湊は幕領、丸亀藩、龍野藩、林田藩、新宮藩等、揖保川
流域の積出港として大いに栄えてきた



江戸時代末期の引札(ポスター)版画